

自己認知と相互独立—相互協調的自己観 ならびに自己の側面の重要性との関係

筑波大学心理学系 外山 美樹

The relations between self-perception and both independent and interdependent construal of self and domain importance of self

Miki Toyama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to investigate the relation between self-perception and independent and interdependent construal of self, and the relation between self-perception and domain importance of self. Participants in the present study were 71 men and 126 women from college students. The results indicated that cultural factors appeared to be responsible for positive and negative illusions. Although (a) only independent of self were positively related to self-enhancement perceptions where negative illusion phenomena were shown, (b) both independent and interdependent construal of self were positively related to self-enhancement perceptions when positive illusion phenomena were shown. Also, results indicated that the more important domain of self they rated, the more positively they appraise themselves those domain of self.

Key words: self-perception, independent and interdependent construal of self, domain importance of self, positive illusion, negative illusion

ポジティブ・イリュージョン (positive illusion) とは、自己高揚の動機に基づく認知バイアスのことであり、「実際に存在するもの・ことを、自分に都合良く解釈したり想像したりする精神的イメージや概念」と定義される (Taylor & Brown, 1988).

従来の正確な自己客観視を精神的健康の必要条件とする考え方は対照的に、近年、欧米では、ポジティブに傾いた自己概念をもっていることが精神的に健康であるとするポジティブ・イリュージョンの考え方が実証的に確認され、理論化が進展している。

わが国では、外山・桜井 (2001) が、多次元的な自己認知の側面を設定し、日本人青年におけるポジティブ・イリュージョン現象の存在の有無を検討した。その結果、日本人青年においては、ポジティブ・イリュージョン現象¹⁾が見られる側面と、逆にネガティブ・イリュージョン現象²⁾が見られる側面のあることが判明した。従来の研究と一致して、能力や才能などの側面や社交性、あるいは外見におい

ては、ネガティブ・イリュージョン現象が見られた。しかし、調和性や誠実性の側面では、ポジティブ・イリュージョン現象の存在が確認された。

ところで、ポジティブ・イリュージョン現象がなぜ生じるのか、より具体的には、欧米人においては様々な領域、側面において一貫したポジティブ・イリュージョン現象が見られるのに対して、われわれ日本人においては、ポジティブ・イリュージョン現象が見られる側面がなぜ限定されるのか、についての直接的な検討はこれまでなされていない。

しかし、これらの問いに対して解決の糸口を与え

- 1) 集団において、多数の人が (統計上有意に)、他者 (平均的な人) に比べて自分の性格、将来、統制の方が上であるとみなす現象。
- 2) 集団において、多数の人が (統計上有意に)、他者 (平均的な人) に比べて自分の性格、将来、統制の方が下であるとみなす現象。

てくれる、東洋人と西欧人の自己の文化差を説明づける試みはいくつかある (ex. Fry & Ghosh, 1980; Kashima & Triandis, 1986)。このうち Markus & Kitayama (1991) は、「相互独立的自己観 (independent construal of self)」と「相互協調的自己観 (interdependent construal of self)」の概念を用いて、異なった文化における自己の様態を同一の枠組みで捉える理論的試みを提唱している。

相互独立的自己観とは、自己は他者から独立したものととらえられ、自律的であることや独自の特性を見つけ表現することが大切と考えられている。自己とは他の人や周りのことごととは区別され、切り離された実体であり、自己は周囲の状況とは独立にその中にあるさまざまな属性によって定義されている (北山・唐澤, 1995)。もっぱら欧米文化に多く見られる考え方とされている。

これに対して、相互協調的自己観とは、人間相互の基本的なつながりを重視し、関係のある他者と調和することが大切と考えられている。自己は他者から明確に分離しておらず、他者が自己の境界の中に入っている。それゆえ、自己とは他の人や周りのことごとと結びついて、高次の社会的ユニットの構成要素となる本質的に関係志向の実体であり、自己の定義はある特定の状況や周囲の他者の性質によって大きく異なる。日本を含むアジア文化に多く見られる考え方とされている。

この考えに従うと、相互協調的自己観を有すると言われるわれわれ日本人のポジティブな自己像は、西欧人の独自性を表出すること、自己主張することではなく、他者との調和を育むこと、協調を維持することなどによって得られる。そこで、集団志向的で周囲の人々との調和や一致を重んじるといわれる日本人には、個人を他者から際立たせる特性の社交性や知性あるいは外見よりは、やさしさやまじめさといった側面においてポジティブ・イリュージョンが見られたのではないかと考えられる。つまり、集団の一員として重要であると考え、それをおもてに出しても集団に受け入れられる自己の特性 (調和性や誠実性) ではポジティブ・イリュージョンが見られ、個人としては重要であると考えられるかもしれないが、それをおもてに出すと集団からネガティブに評価されると考えられる自己の特性 (知性や外見など) についてはネガティブ・イリュージョンが見られたのだと言えよう。このように考えるならば、その社会で規範的な自己の特性ほどポジティブ・イリュージョンが生じやすいと考えられる。

しかし、これらのことはまだ推論の域を超えていない。そこで、本研究では、日本人においてポジ

ティブ・イリュージョン現象とネガティブ・イリュージョン現象が見られる側面が存在するののかの所以を検討すべく、ポジティブ・イリュージョン (ならびにネガティブ・イリュージョン) 現象の観点から、自己認知と相互独立-相互協調的自己観との関連性を探ることを第1の目的とする。

また、Taylor & Brown (1994) は、特に自己にとって重要な側面においてポジティブ・イリュージョンが見られることを報告している。そこで、自己高揚的な認知とその側面における重要性との関連性を探ることを第2の目的とする。個人がその側面を重要に思うほど自己高揚的な認知を示す、すなわち自己の側面の重要性と自己認知との間には正の相関関係があるものと予想される。

自己認知と相互独立-相互協調的自己観ならびに自己の側面の重要性との関連性を探ることは、日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象ならびにネガティブ・イリュージョン現象の全体像を探ることにおいて、一助となるものと考えられる。

方 法

被調査者

茨城県の国立大学生197名 (男子71名, 女子126名)。被調査者の平均年齢は、20.39歳 ($SD=2.03$) であった。

質問紙

以下の質問紙を用いた。

(1) 自己認知尺度: 外山・桜井 (2001) の「ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙」の「自己」の領域を用いた。社交性 (ex. “社交的である”), 知的能力 (ex. “頭の回転が速い”), 調和性 (ex. “親切である”), 誠実性 (ex. “誠実である”), 身体的望ましさ (ex. “魅力的である”) の5つの下位分類、各5項目から構成される。また、「ポジティブ」と「ネガティブ」の下位尺度を設定して分析を行った。「ポジティブ」というのは、外山・桜井 (2000) において、ポジティブ・イリュージョン現象 [集団において、多数の人が (統計上有意に)、他者 (平均的な人) に比べて自分の能力や性格の方が上であるとみなす現象] が見られた項目群である。「ネガティブ」というのは、外山・桜井 (2000) において、ネガティブ・イリュージョン現象 [集団において、多数の人が (統計上有意に)、他者 (平均的な人) に比べて自分の能力や性格の方が下であるとみなす現象] が見られた項目群である。7段階評定 (-3 ~ +3 点) である。「同じ大学に通う一般的 (平均的) な大学生と比べてあなたは」と評定を求める相対的方法

Table 1 相互独立－相互協調的自己観との相関係数

自己認知下位尺度	相互独立性			相互協調性		
	全体	個の認識・主張	独断性	全体	他者への親和・順応	評価懸念
ポジティブ	.13*	.15*	.09	.06	.08	.01
ネガティブ	.34**	.40**	.21**	-.13	.09	-.28**

注) * $p < .05$, ** $p < .01$. $n = 197$.

Table 2 群別における基礎統計

相互独立性	n	相互独立性得点 (SD)	「ポジティブ」得点 (SD)	「ネガティブ」得点 (SD)
低群	108	27.75 (3.63)	43.91 (.76)	33.79 (.86)
高群	88	37.28 (3.55)	46.98 (.88)	39.28 (.98)
相互協調性	n	相互協調性得点 (SD)	「ポジティブ」得点 (SD)	「ネガティブ」得点 (SD)
低群	100	32.57 (2.44)	44.11 (.78)	36.08 (.87)
高群	96	39.68 (3.55)	46.78 (.87)	36.99 (.96)

を用いた。

(2) 相互独立－相互協調的自己観尺度：高田・大本・清家 (1996) の尺度を用いた。相互独立的自己観 (以下, “相互独立性” と略す) と相互協調的自己観 (以下, “相互協調性” と略す) の下位尺度から成る。また, 相互独立性は, 他者とは異なる自分自身を認識し表現する「個の認識・主張」と他者に配慮せず自分の判断で行動する「独断性」から, 相互協調性は他者との対立の回避や協調を重視する「他者への親和・順応」と他者を意識し評価を気にする「評価懸念」の各々2つの下位尺度から成る。相互独立性10項目, 相互協調性10項目の計20項目から構成され, 5段階評定 (1～5点) であった。

(3) 自己の側面の重要性尺度：「自己」の5つの下位分類 (社交性, 知的能力, 調和性, 誠実性, 身体的望ましさ) について, “あなたにとってどれくらい重要であるのか” を “全く重要ではない (1点)” から “非常に重要である (5点)” の5段階評定 (1～5点) で回答させた。得点が高いほど, その側面を重要に思っていることを示す。

手続き

上記の尺度が講義終了後に集団形式で実施された。

結果と考察³⁾

(1) 自己認知と相互独立－相互協調的自己観との関連性

相互独立性尺度 (全体) の平均値 (SD) は, 32.03 (5.95), α 係数は.78, 相互協調性尺度 (全体) の平均値 (SD) は, 36.04 (4.44), α 係数は.63であっ

た。また, 相互独立性下位尺度の「個の認識・主張」の平均値 (SD) は, 12.14 (2.94), α 係数は.73, 「独断性」の平均値 (SD) は, 19.88 (3.90), α 係数は.69であった。そして, 相互協調性下位尺度の「他者への親和・順応」の平均値 (SD) は, 22.13 (2.80), α 係数は.80, 「評価懸念」の平均値 (SD) は, 13.90 (2.96), α 係数は.71であった。

まずは, 相互独立－相互協調的自己観尺度と自己認知下位尺度の相関係数を求めたところ (Table 1 参照), 「ネガティブ」と相互独立性尺度 (全体) ならびに相互独立性の下位尺度である「個の認識・主張」, 「独断性」と正の相関係数が得られた (順に, .34, .40, .21, $p < .01$)。また, 相互協調性の下位尺度である「評価懸念」と負の相関係数が認められた ($-.28, p < .01$)。一方, 「ポジティブ」においては, 相互独立性尺度 (全体) ならびに相互独立性の下位尺度である「個の認識・主張」においてのみ弱い正の相関係数が得られた (順に, .13, .15, $p < .05$)。

次に, 相互独立性尺度得点の平均値 (32.03), 相互協調性尺度の平均値 (36.04) に基づいて各々高群, 低群を設けた (Table 2参照)。そして, 「ポジティブ」ならびに「ネガティブ」を従属変数, 相互独立性 (低群・高群), 相互協調性 (低群・高群) を独立変数とする2要因分散分析を各々行った。

3) 本研究では, 自己認知と相互独立－相互協調的自己観ならびに自己の側面の重要性の関係を探ることを目的とするため, また紙面の関係上, 自己認知尺度における詳細な検討は記載しない。詳細は, 外山・桜井 (2000, 2001) を参照のこと。

その結果、「ポジティブ」においては、相互独立性、相互協調性の主効果が見られ ($F(1,196)=6.98, p<.01$; $F(1,196)=5.28, p<.05$), 各々相互独立性、相互協調性が高い人が「ポジティブ」得点が高いことが示された (Table 3参照). なお、交互作用は有意とならなかった. そこで、相互独立性低群・高群、相互協調性低群・高群の組合せにおいて4群を設定し (Table 4参照)、「ポジティブ」を従属変数とする一元配置の分散分析を実施した. その結果、群間における差が見いだされ ($F(3,192)=3.07, p<.05$), 多重比較 (Tukey法) を行ったところ、相互独立性、相互協調性がともに高い群 (HH群) がともに低い群 (LL群) よりも「ポジティブ」得点が高いことが明らかにされた (Table 4, Fig. 1参照).

一方、「ネガティブ」においては、相互独立性においてのみ主効果 ($F(1,194)=17.95, p<.01$) が認められ (Table 5参照), 相互独立性が高い人が「ネガティブ」得点が高いことが示された (Table 2参照). なお、交互作用は有意とならなかった.

本研究の結果より、「ネガティブ」、すなわち日本人においてネガティブ・イリュージョン現象が見られた側面においては、わが国の文化の影響を受けにくい相互独立性の高い人ほど自己高揚的な認知をすることがわかった. 「ネガティブ」の側面とは、知的能力や身体的望ましさといった特性で、そうした

側面で自己高揚することは、日本の文化においては集団の成員からネガティブに評価される可能性が考えられる. そこで、こういった側面で自己高揚できるのは、わが国の文化的影響を受けにくい人なのでであろうと示唆される.

ところで、高田・松本 (1995) や高田 (1999) は、青年が自己を再構成していく際に、相互独立性の発達はむしろ抑制されると報告している. 青年期は生涯発達の見ても相互独立性の水準が低く、知的能力や身体的望ましさとといった側面で自己高揚を行うことは、日本の文化における集団の成員からネガティブに評価される、つまり日本文化には適合しないと過敏に察するので、こういった側面では自己卑下的な認知を示し、結果として日本人集団において

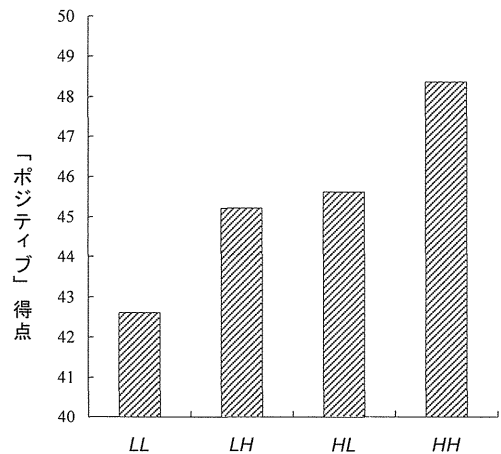


Fig. 1 相互独立性・相互協調性によるタイプ別における「ポジティブ」得点の平均値

注) LL 群: 相互独立性低群+相互協調性低群.
LH 群: 相互独立性低群+相互協調性高群.
HL 群: 相互独立性高群+相互協調性低群.
HH 群: 相互独立性高群+相互協調性高群.

Table 3 「ポジティブ」における分散分析表

	SS	df	MS	F
相互独立性①	395.97	1	395.97	6.98**
相互協調性②	299.81	1	299.81	5.28*
①×②	.16	1	.16	.00
誤差	10899.46	192	56.77	
全体	11422.75	195		

注) * $p<.05$, ** $p<.01$.

Table 4 4群別における基礎統計

群	n	相互独立性得点 (SD)	相互協調性得点 (SD)	「ポジティブ」得点 (SD)
LL	38	28.74 (2.50)	33.08 (2.68)	42.61 (7.10)
LH	70	27.21 (4.03)	39.70 (2.30)	45.21 (7.77)
HL	62	37.60 (3.97)	32.29 (2.98)	45.61 (7.34)
HH	26	36.54 (2.14)	39.62 (2.83)	48.35 (7.96)

注) LL 群: 相互独立性低群+相互協調性低群.
LH 群: 相互独立性低群+相互協調性高群.
HL 群: 相互独立性高群+相互協調性低群.
HH 群: 相互独立性高群+相互協調性高群.

はネガティブ・イリュージョン現象が見られるものと示唆される。

一方、「ポジティブ」、すなわち日本人においてポジティブ・イリュージョン現象が見られた側面においては、相互独立性、相互協調性ともに関係が見られ、われわれ日本人の典型的な自己観（相互協調性が高くかつ相互独立性が低い）においてのみ関係があるというわけではなかった。「ポジティブ」の側面とは、調和性や誠実性といった特性で、こうしたわれわれの文化における集団の一員として重要であると考えられる側面においては、日本人においても欧米人と同様にそれをおもてに出し、自己高揚してもよいと考えるので、相互独立性の傾向が高い人ばかりでなく、日本人に多いとされる相互協調性の高い人でも自己高揚的な認知をするものと解釈できる。これらの結果は、その社会で規範的な自己の特性ほどポジティブ・イリュージョン現象が生じやすいことを示唆するものである。

(2) 自己認知と自己の側面の重要性との関連性

自己認知の5側面における重要性の項目平均(SD)は、社交性が3.94 (.77), 知的能力が4.12 (.84), 調和性が4.54 (.65), 誠実性が3.57 (.96), 身体的望ましさ3.42 (.96)であり、調和性の重要性得点が高く、身体的望ましさの重要性得点が低かった。

次に、自己認知下位分類（社交性、知的能力、調

和性、誠実性、身体的望ましさ）について各々5項目の得点を足し合わせ、その合計得点とその側面の重要性の項目平均得点との相関を求めたところ、Table 6に示す通りになった。自己認知とそれに対応する重要性との相関係数はいずれも有意（有意傾向も含む）となっており（社交性で.19 ($p < .01$), 知的能力で.12 ($p < .10$), 調和性で.20 ($p < .01$), 誠実性で.32 ($p < .01$), 身体的望ましさで.25 ($p < .01$)), 個人が各側面を重要と思うほどその側面において自己高揚的な認知をすることが明らかにされた。Taylor & Brown (1994) は、自分にとって重要な側面において自己高揚的な認知をする傾向のあることを指摘しているが、本研究の結果も Taylor & Brown (1994) の主張を裏づけるものであった。

まとめと今後の課題

本研究では、自己の文化差を説明づける概念の1つとして、相互独立－相互協調的自己観に焦点を当てて、ポジティブ・イリュージョン（ならびにネガティブ・イリュージョン）現象のメカニズムを探った。その結果、われわれ日本人においてネガティブ・イリュージョン現象が見られる側面においては、相互独立性と関係があり、ポジティブ・イリュージョン現象が見られる側面においては、相互独立性、相互協調性ともに関係があり、文化的自己観がわれわれ日本人においてイリュージョン現象が見られる側面に影響を及ぼしていることが改めて確認された。

しかし、北山 (1998) も述べているように、文化的自己観は社会的表象であり、必ずしも個人的・認知的表象ではない。つまり、ある文化に属する人、例えば日本人全員が一様な相互協調的自己観を持つわけではもちろんない。しかし、社会的表象は何らかの形で認知的表象に反映され、個人の自己スキーマや様々な自己概念等の自己認識に影響されるものと考えられる。

Table 5 「ネガティブ」における分散分析表

	SS	df	MS	F
相互独立性①	1249.27	1	1249.27	17.95**
相互協調性②	34.40	1	34.40	.49
①×②	8.49	1	8.49	.12
誤差	13221.76	190	69.59	
全体	14531.94	193		

注) ** $p < .01$.

Table 6 自己認知の5側面における重要度との相関係数

自己認知下位分類	重要度評定				
	社交性	知的能力	調和性	誠実性	身体的望ましさ
社交性	.19**	-.11	.04	-.02	.07
知的能力	-.05	.12†	.05	.07	.10
調和性	.08	-.02	.20**	.10	.03
誠実性	.08	.04	.23**	.32**	-.02
身体的望ましさ	.12	.11	.06	.10	.25**

注) † $p < .10$, ** $p < .01$. $n = 197$.

そこで、本研究では、個人の“自己の側面の重要性”にも焦点を当てて検討を行った。その結果、Taylor & Brown (1994) の指摘通り、自分にとって重要な側面において自己高揚的な認知をする傾向のあることが明らかにされた。これは、日本文化で優勢な文化的自己観の規定が、個人の自己スキーマに取り込まれたことを含意しているものと解釈できるかもしれない。つまり、社会的表象である文化的自己観として、日本の社会においては誠実性や調和性が重要視されていることを個人的・認知的表象に反映させることによって、自分にとって重要であると思う側面において、ポジティブ・イリュージョンが形成されるのかもしれない。

しかし、社会的表象と個人的・認知的表象の直接的な関係においては、本研究では検討されておらず、今後詳細に検討していかなければならないであろう。また、自己認知との間には、これまで様々な心理的特性との関連性が見いだされているが (ex. 外山, 1999, 2001), 今後は、これらの要因間の構造をより適切に捉え、ポジティブ・イリュージョン (ならびにネガティブ・イリュージョン) のメカニズムのモデルを提出していきたい。

引用文献

- Fry, P.S. & Ghosh, R. 1980 Attributions of success and failure: Comparison of cultural differences between Asian and Caucasian children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 11, 343-363.
- Kashima, Y. & Triandis, H.C. 1986 The self-serving bias in attributions as a coping strategy: A cross-cultural study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 17, 83-97.
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, 66, 173-178.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立の一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- Taylor, S.E. & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 211-222.
- Taylor, S.E. & Brown, J.D. 1994 Positive illusions and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 211-222.
- 外山美樹 1999 日本人におけるポジティブ・イリュージョンと精神的健康 筑波大学心理学研究科平成10年度中間論文 (未公刊)
- 外山美樹 2001 自己認知と自尊感情ならびに自己意識との関係 筑波大学心理学研究, 23, 161-167.
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461.
- 外山美樹・桜井茂男 2001 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72, 329-335.

(受稿8月28日:受理11月13日)